HAL open science

Allocutivity in Ryukyuan languages

Anton Antonov

▶ **To cite this version:**

Anton Antonov. Allocutivity in Ryukyuan languages. / / . , , 2016, 978-4-87424-692-4 C3081. hal-01386692

HAL Id: hal-01386692

https://hal.science/hal-01386692

Submitted on 25 Sep 2018

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

第1章

琉球諸語のアロキュティビティー[1]

アントン・アントノフ（INALCO−CRLAO）

1. アロキュティビティーとは何か？

アロキュティビティーという用語は既に十九世紀にフランスのバスク語専門家ルイー・ルシアン・ボナパルトによって導入されたものである (Bonaparte 1862:19-21)。バスク語のほとんどの方言にある現象で、聞き手が親称二人称の代名詞である hiを使って話すべき場合，その聞き手が動詞の項でなければ，必ず（叙述文の）すべての定形動詞は，特別な聞き手活用をせざるを得ないというのが，アロキュティビティーと呼ばれる現象である。なお、フランスに行われている一部の方言にはその他に敬称二人称 zuを使ってもまた似たような聞き手活用が使われている (Hualde and de Urbina 2003:242)。さらに注目すべきことには、この特別な聞き手活用の表示は相手が動詞の項である場合の動詞の二人称の表示とは違うのである。

次の例文はバスク語の標準語の例である。例（1）は唯一項が一人称の自動詞で、例（2）は動作主が一人称で被動作主が三人称の他動詞である。a は親称を用いないときの用法、b と c は親称を用いて相手が男性か女性かによって使い分けられる。なお、例文に使われた動詞はいわゆる単純形の（助動詞なしで活用変化する）ものである。

(1) a. Bilbo-ra n-oa

Bilbao-ALL 1U-go

[1] 本稿は筆者が2013年2月に京都大学で開催された国際ワークショップ「琉球諸語と古代日本語に関する比較言語学的研究」で発表したもの（"Verbal allocutivity in Ryukyuan"）をもとにしている。その際コメントをくださった方々や本稿執筆にあたり助言をいただいた編集者さんにお礼を述べたい。

「ビルバオへ行く」（親称を用いない場合）

b. Bilbo-ra n-oa-k

Bilbao-ALL 1U-go-ALLOC:FAM:M

「ビルバオへ行く」（親称を用いて相手が男性の場合）

c. Bilbo-ra n-oa-n

Bilbao-ALL 1U-go-ALLOC:FAM:F

「ビルバオへ行く」（親称を用いて相手が女性の場合）

(2) a. Diru-a da-kar-t

money-DET ASP:3P-bring-1A

「お金を持ってくる」（親称を用いない場合）

b. Diru-a za-karr-e-a-t

money-DET ASP:3P-bring-e-ALLOC:FAM:M-1A

「お金を持ってくる」（親称を用いて相手が男性の場合）

c. Diru-a za-karr-e-na-t

money-DET ASP:3P-bring-e-ALLOC:FAM:F-1A

「お金を持ってくる」（親称を用いて相手が女性の場合）

このようにバスク語のアロキュティビティーはある条件の下で動詞に項でない相手の標示が現れるものであるので、それを動詞アロキュティビティーと呼ぶことにする。このアロキュティビティーという用語は今まで専らバスク語に応用されてきたものであるが、この現象は決してバスク語に限られたものではないように思われる。

バスク語のアロキュティビティーはそもそも話し手と相手の間に存在する関係が文法的に現れているに過ぎない。そして方言によって、それは親しい間柄でも敬遠の間柄でもありうる (de Rijk 1998)。文法化の度合いや個々の用法に違いがあるものの、似たような現象が世界の各地の言語にも見られる（詳しくは Antonov 2015参照）。孤立語のプメ語（ベネズエラ、Mosonyi and Garcia 2000) とナンビクアラ語（ブラジル、Kroeker 2001)、スー語族のマンダン語 (Kennard 1936)、アフロ・アジア語族のベジャ語 (Appleyard 2004, 2007) もさることながら、日本語と韓国・朝鮮語（以後、韓国語と呼ぶ）にもアロキュティビティーによく似ている現象があるように思われる。たとえば、日本語のマス形はバスク語の敬称聞き手活用とほぼ同様なものである。丁寧体とも呼ばれるマス形を使った文体は事実上非項（疑

問文の場合を除く）の相手の存在と話し手とその相手の間に存在している関係を述語に標示しているのである。なお、常にマス形を取っている丁重動詞は聞き手がその項になれない点でバスク語の聞き手活用の動詞と変わらない。

表 1: 標準語の丁重動詞

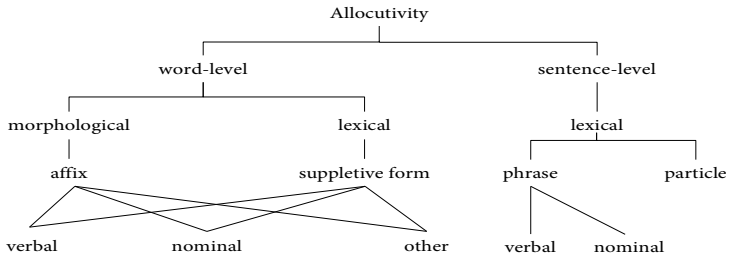
-de goza-imas-
-(de) or-imas-
moos(h)-imas-
itas(h)-imas-
mair-imas-

1.1 アロキュティビティーの標示について

標示されている場所によって語レベルのアロキュティビティーと文レベルのアロキュティビティーとが区別できる。

前者には形態的なもの（バスク語、ベジャ語、マンダン語、日本語など）と語彙的なもの（ジャワ語など）とがある。後者には主に終助詞によるもの－ビルマ語 (Wheatley 2003:202)、タイ語 (Diller 2008:47)、ベトナム語 (Thompson 1987:260 や Panfilov 1993:264-287 など) がある。

表 2: アロキュティビティーの標示



1.2 （動詞）アロキュティビティーとは違う現象

動詞アロキュティビティーはまず当然のことながら聞き手が動詞の項（主語や目

的語など）である場合を含まない。聞き手が項かどうか、はっきりとしているケースとそうでないケースがある。日本語や韓国語 (Sohn 1999:407ff) やチベット語 (Tournadre and Dorje 1998:439-43) のような言語の敬語システムの場合は、尊敬語と謙譲語の二種類の動詞が存在しているが、尊敬語は主語、謙譲語は主語以外の項が尊敬の対象になるわけですが、聞き手を尊敬の対象にする場合は、それらを項位置に置かなければならない。したがって、聞き手がその動詞の項（主語か目的語など）であるのでそれはアロキュティビティーとは呼ばない。このようなシステムは東アジアの各地の他に、ポナペ語にもあり (Rehg and Sohl 1981:359ff) 、ポナペ語にはそのほかに尊敬・謙譲助数詞もあるが、いずれもアロキュティビティーではない。また、動詞の命令形が聞き手の性別によって使い分けられる語形を持っている言語もあるが、この場合も聞き手が命令形の動詞の主語にあたるので、アロキュティビティーの一例として認定できない。

なお、聞き手が非項でも動詞以外に標示されるような場合も含まない。例えば、日本語の丁寧語や丁重語には少数ではあるが、名詞 (「お花」「拙宅」など) 、副詞（「もはや」など）が存在するが、これらは動詞アロキュティビティーと見ない。さらに、複雑なスピーチレベルの敬語システムを有するオーストロネシア語族マレー・ポリネシア語派のジャワ語 (Poedjosoedarmo 1968 、 1969、 Geertz 1976、 Wolff and Poedjosoedarmo 1982) 、スンダ語、マドゥラ語 (Stevens 1965 ）などのスピーチレベル別に話し手と非項の相手の間の関係をエンコードする非動詞のものも動詞アロキュティビティーと見ない。ビルマ語 (Wheatley 2003:202) やタイ語 (Diller 2008:47) のように終助詞によって相手への敬意を表すケースも同様である。

最後に、動詞に非項の聞き手ではなく、非項の話し手（の性）を標示する対照的な現象があるが、それを仮に動詞反アロキュティビティーと呼んで、動詞アロキュティビティーと見ない。例えば、スー語族のラコタ語では必須ではないが定形動詞は終助詞を伴って話し手の性（正しくはジェンダー）を標示することがある (Trechter 1995, Mithun 1999)。 また、ビルマ語やタイ語に存在する、聞き手への敬意とつながっている、非動詞アロキュティビティーの一種である終助詞も話し手の性（ジェンダー）をも標示する点でこれに似ている。これらも動詞アロキュティビティーには含まない。

さて、以上のようなケースを考慮に入れず、本稿では琉球諸語における専ら動詞アロキュティビティーの共時的且つ通時的な概観を試みる。

2.　琉球諸語における動詞アロキュティビティー

動詞アロキュティビティーの存在は沖縄の古語や現代の北琉球の方言の描写には丁寧語としてではあるが、わずかながら記述されている。

2.1　現代琉球諸語における動詞アロキュティビティー

動詞アロキュティビティーは専ら奄美や沖縄諸方言に存在するようである（上村 1997:347, 島袋 1997:361, 津波古 1997:381, 須山 1997:452）。八重山方言には存在するかどうか判断しがたい（石垣方言には狩俣　1997:407と宮良　1995:236-243 によれば存在するが、宮城　2003a,b と前新 2011はそれに言及していない）。例文はすべて各々の著者の表記を用いている。

2.1.1　奄美方言

奄美方言の動詞アロキュティビティーの接尾辞は以下の通りである（内間・野原 1976、内間　1984、寺師 1985、平山　1986、菊・高橋2005、 Niinaga 2010 と重野 2010a,b ）。

表 3:　奄美方言の動詞アロキュティビティー

大島	浦	-jor-
	名瀬	-jo:r-
	湯湾	-jawor-
		-jo:r-
	古仁屋	-jo:r-
		-jawor-

喜界島	志戸桶	-e:r-
	荒木	-e:r-
徳之島	浅間	-e:r-
	井之川	-je:r-
	亀津	-je:r-
沖永良部島	畔布	-jabir-
	和泊	-jabir-
	具志堅	-jabir-
	田皆	-jabir-
	知名	-jabir-
与論島	茶花	-jabir-

上記の参考文献に挙げられた例文を以下に示す。

大島浦方言

浦方言には -jor- という標準語のマス形にほぼ同類の接尾辞がある（重野 2010a:284-5 ）。 しかし、この形式は、マス形とは違って、尊敬すべき主語のある動詞に直接付けず、動詞の尊敬の形に付く。

(3) basu=nu k-jo-ta
バス =NOM 来る -ALLOC-PRF
バスが来ました。

(4) ʔamu=nu fur-jor-i
雨 =NOM 降る -ALLOC-FIN
雨が降っています。

(5) hoN darjor-i
本 COP:ALLOC-FIN
本です。

(6) waN=ja ʔaQsja gaQkoo=ccji ʔi-jor-i
1SG=TOP 明日 学校=ALL 行く -ALLOC-FIN
私はあした学校へ行きます。

(7) sensee=nu gaQkoo=ccji ʔimor-jor-i
先生 =NOM 学校 =ALL 行く :HON-ALLOC-FIN
先生は明日学校へ行きます。

大島名瀬方言

名瀬方言では -jo:r- という接尾辞を使って動詞の丁寧体ができるという（寺師 1985:131,187 ）。

(8) a. jum-jo:-N
読む -ALLOC-FIN
（私・貴方・彼が）読みます。

b. jum-jo:r-aN
読む -ALLOC-NEG

（私･貴方･彼が）読みません。

助動詞 ar-(ある) を使って形容詞の丁寧体も成り立つ。

(9) a. ha:sa (a)r-jo:-N
赤い ある -ALLOC-FIN
赤いです。
b. ha:sa (a)r-jo:r-aN
赤い ある -ALLOC-NEG
赤くないです。

大島古仁屋方言

(10) arrja kak-jawom
彼 .TOP 書く -ALLOC.FIN
彼が書いている。 (内間 [1984:634])

(11) arrja kuṣa tutur-jawor
彼 .TOP 草 取る -ALLOC
彼が草を刈っている。(内間 1984:634)

大島湯湾方言

(12) waN-ga ik-jawoN
1SG-NOM 行く -ALLOC.FIN
私が行きます。 (内間 1984:635-6)

(13) an kɨɨ=ja taasa-joo-i
DEM 木 =TOP 高い -ALLOC-NPST
あの木が高いです。 (Niinaga 2010:71)

喜界島志戸桶方言

(14) wa-ŋa kʔi-je:N
1SG-NOM 着る -ALLOC.FIN
私が着ます。 (内間 1984:641)

(15) wa-ŋa jum-e:N
1SG-NOM 読む -ALLOC.FIN
私が読みます。 (内間 1984:641)

修飾節にも表れる。

(16) kʔi-je:N tʃʔ u
着る -ALLOC.ADN 人
着ている人 (内間 1984:641)

(17) kʔ i-je: so:
着る -ALLOC.ʔ NMLZ.TOP
着ていること (内間 1984:641)

徳之島井之川方言

(18) waN-ga jum-eruN
1SG-NOM 読む -ALLOC.FIN
私が読みます。 (内間 1984:646)

(19) waN-ga kʔir-eruN
1SG-NOM 着る -ALLOC.FIN
私が着ます。 (内間 [1984:646])

徳之島亀津方言

(20) waN-ja ik-er-aN da
1SG-TOP 行く -ALLOC-NEG EXCL
私は行きませんよ。 (平山 1986:944)

(21) waa-ga jum-er-uN da
1SG-NOM 読む-ALLOC-FIN EXCL
私が読みますよ。(平山 1986:944)

(22) ʔama-ja ʔatʃa:r-er-uN da
あそこ -NOM 暑い -ALLOC-FIN EXCL
あそこは暑いですよ。(平山 1986:944)

沖永良部島和泊方言

(23) wa:-ga: itʃabuN
1SG-NOM 行く .ALLOC.FIN
私が行きます。 (平山 1986:868)

(24) wa:-ga: jum-jabuN
1SG-NOM 読む -ALLOC.FIN
私が読みます。 (平山 1986:868)

沖永良部島田皆方言

(25) wa:-ga hakkjabuN
1SG-NOM 書く .ALLOC.FIN
私が書きます。 (内間 [1984:652])

従属節や修飾節にも表れる。

(26) hakkjabu-ti

書く .ALLOC.?-CNV

書いて（書きまして） (内間 [1984:652])

(27) hakkjabunu tʃʔ u

書く .ALLOC.ADN 人

書く人 (内間 [1984:652])

(28) hakkjabu ʃi ja

書く .ALLOC.ADN NMLZ TOP

（だれかが）書いているの・ことは

沖永良部島知名方言

(29) wa:-ga hak-jabur-a

1SG-NOM 書く -ALLOC.NPST-HORT

私が書きましょう。 (平山 1986:904)

従属節や修飾節にも表れる。

(30) hakkjabunu tʃʔ u:=wa taru diro ka ja:

書く .ALLOC.ADN 人 =TOP 誰 COP INTER PRT

書いている人は誰かな？

(31) hakkjabutimu wakajaburan dja:

書く .ALLOC.CONCESS 分かる .ALLOC.NEG EXCL

書いても分かりませんよ。

与論島方言

与論島方言は -jabir- 接尾辞を使う。菊・高橋 (2005:787-8) に挙げられている

例文のほとんどが聞き手が動詞の主語であるが、そうでないときも使われるようで、標準語のマス形と似ている。

(32) aQcja: sikama tacjabjuN
明日 朝 leave.ALLOC.FIN
明日の朝、出発します。

(33) na:ja kacja:bju:siga tusja: kacjajabiraNnu
名前 .TOP 書く .ALLOC.NMLZ.ADV 年 .TOP 書く .ALLOC.PRF.NEG.FIN
名前は書いてありますが、年齢は書いてありません。

重野(2010b:14-15)の例文には三人称で且つ話し手の身内が主語であるものがある。

(34) wutturu=ga gakoo=kati ik-jaabju-i
弟 =NOM 学校 =ALL 行く -ALLOC-NPST
弟が学校へ行きます。

2.1.2 沖縄方言

沖縄方言のアロキュティーブ活用は -(j)a(:)bi(:)- という接尾辞を用いる（内間・野原 1976, 内間 1984, 平山 1986, 生塩1999、伊是名島方言辞典 2004）。

本部町並里方言

(35) dʒi: kakabiN
character write.ALLOC.FIN
書きます。 (内間 1984:664)

(36) haki-jabir-aba
書く -ALLOC-HYP

書けば

(37) haki-jabi-ti hara

書く -ALLOC-CNV から

書いてから

(38) haki-jabinu tʃu:

書く -ALLOC.ADN 人

書く人

首里方言

(39) maa-Nkai-N ʔic-abir-aN

どこ -ALL-FOC 行く -ALLOC-NEG.FIN

どこへも行きません。(OGJ 2001 [1963]:23)

(40) cura-winagu tuzi sjo:ru ccu-nu u-ibi:-taN

綺麗 - 女 妻 する .PROG.ADN 人 -NOM いる -ALLOC-PST.FIN

美しい妻を持っている男がいました。(OGJ 2001 [1963]:23)

(41) ʔasaN banuN caa siwai bike:i sjooibi:-taN

朝.FOC 晩.FOC always 心配 ばかり する .ALLOC.PROG-PST

いつも心配ばかりしていました。(OGJ 2001 [1963]:24])

形容詞にも続くことができる。

(42) kunu tuzee curasaibi:-ta-si-ga

この 妻 .TOP 綺麗 .ALLOC-PST-NMLZ-CONJ

その妻は美しかったですが…(OGJ 2001 [1963]:24])

豊見城西銘方言

(43) wa:-ga tʃi-jabiN

1SG-NOM　　着る　-ALLOC.FIN
私が着ます。（内間 1984:674）

2.1.3　宮古方言

宮古方言にはアロキュティビティーがないのが定説のようである（仲宗根 1987 [1976]:233、 Hayashi 2010、 Pellard 2010 と Pellard 2012（私信））。

西岡（ 2010:206-7 ）は野原方言のビャー（ヤー）（標準語の「～かな」に相当）がもともとは丁寧の意を持っていた可能性があるとしているが、これは実は Yogi (1934:75)が挙げる宮古方言の日本語訳に使われているマス形によるもののようで、認めがたい。

なお、西岡 (2010:208) 宮古方言の民謡に現れるサマーズ（「する」の尊敬語、「なさる」）とンミャーズ（「行く・来る」の尊敬語、「いらっしゃる」）の二つの例が丁寧語（アロキュティブ形）として使われている説を提唱しているが、野原方言の話者の賛成を得られないという。

(44) yu-ya　aki　do　samasu　oya　yo
夜-TOP　夜明け .CNV FOC　する :HON　お父さん EXCL
お父さんヨ、もうすぐ夜明けです。

(45) mii-dusu-nu mmjatarjaa
新しい - 年 -NOM 来る :HON:CNV
新しい年が来たら

尊敬動詞から丁寧動詞が発達するのは珍しくないが（表4参照）、宮古方言はその道を辿って来なかったようである。

2.1.4　八重山方言

宮城(2003a,b)によると、石垣方言の ʔo:ruŋ は尊敬語の動詞と助動詞として使われているという。

(46) me:da ʔo:r-an-u
まだ 行く･来る :HON-NEG-IMPRF
まだいらっしゃらない。 (宮城 2003a:187)

(47) dʒin-ja taka:niŋ ar-oor-uŋ
お金 -TOP たくさん ある -HON-IMPRF
お金がたくさんおありだ。 (宮城 2003b:55)

しかし、宮良(1995:236-7) と狩俣 (1997:407)によれば、次の例のように丁寧形(アロキュティブ形)としての用法もあると主張している。

(48) çibatʃi-naŋga pïï-ya ar-oor-un neera
火鉢-LOC 火 -TOP ある -ALLOC-IMPRF INTER:ALLOC
火鉢に火がありますか。

動詞アロキュティビティーではないのでここで取り上げないが、宮良 (1995) も宮城 (2003a) もユーという丁寧の意を添える終助詞の存在に言及する。この終助詞は竹富方言 (前新 2011:36) や波照間方言(Aso 2010:209)にもある。

2.2 動詞アロキュティビティーの通時的考察と文法化

沖永良部島、与論島と沖縄方言の三方言のアロキュティブ接尾辞 -(j)abi(r)-は中古語の丁重(助)動詞ハベリに由来する。

(49) midukara pa nifon-no fito n-ite nan faber-isi
1 TOP 日本 -GEN 人 COP-SEQ FOC だ :ALLOC:RSP-PST:ADN
私は日本人でした。 (HM I:165.10-11)

(50) sono noti namu kado firo-ku mo nar-i-faber-u
DEM 後 FOC 門 広い -CNV FOC なる -CNV-AUX:ALLOC:RSP-FIN
その後、家の門が広くなりました。 (TM 32.3)

(51) nandeu sar-u koto ka s-i-faber-an

なぜ　そんな　-ADN　こと INTER　する　-CNV-AUX:ALLOC:RSP-HYP:ADN
なぜそんなことをしましょうか。　(TM 32.4)

この動詞は既に上代語に現れるが、丁寧・丁重動詞どころか、その時代はまだ謙譲動詞として使われていたかどうかさえ明確ではないようである。

(52)　Nakamaro$_2$- i TADASI-KI OMI$_1$ tosite　PABE$_1$R-I-t-u
仲麻呂　-NOM 忠実 -ADN　臣　として　仕える　:HUM-CNV-PRF-FIN
仲麻呂は忠実な臣として奉行した。 (SM 34)

琉球諸語に初めて現れるのは十五世紀の申叔舟著の海東諸国記で、十六世紀のおもろさうし(OS)には丁寧用法もある謙譲助動詞として使われている（仲宗根 1987 [1976]:233 ）。　OS には勧誘形しか現れない（外間・西郷 1976 [1972]:523, 高橋 1991:295, 431 ）。

(53)　wezoniya=no uchi=ya amahe-yaber-a
ゑぞ祖　=GEN　家　=TOP 喜ぶ　.CNV-AUX:ALLOC-HORT
hokor-i-yaber-a
喜ぶ　-CNV-AUX:ALLOC-HORT

ゑぞ祖の家で喜び祝福しましょう (OS 5-78 [289], 外間・西郷　1976 [1972]:108, 外間・波照間 2002:209)

(54)　dashima　mabur-i-yaber-a
大島　守る　-CNV-AUX:ALLOC-HORT
我が島を守りましょう！　(OS [362], 外間・西郷　1976 [1972]:138、外間・波照間　2002:249)

(55)　suhe=no　china ut-i-yaber-a
強い=GEN　綱　打つ -CNV-AUX:ALLOC-HORT
強い綱を作りましょう (OS [402], 外間・西郷　1976 [1972]:154,

外間・波照間　2002:270)

(56)　omoro-tane　　ko-yaber-a

すばらしい　- 種　　乞う　-CNV-AUX:ALLOC-HORT

すばらしい種を乞いましょう　(OS [404], 外間・西郷　1976[1972]:154, 外間・波照間　2002:271)

-yaber- のアロキュティブ用法は琉歌に明確に現れる。スルを例に取ると、勧誘形（シャビラ）の他には、非過去形の連体形（シャビル）や過去形（シャビタン）、疑問形（シャビガ）などが現れる　（外間　1997　と西岡　1994）。

一方、奄美大島のアロキュティブ形の由来は、重野 (2010b:286)によると、尊敬動詞オワル（中古語のオワスと同根、迫野　2005:4-8 ）に遡るという。このオワルは石垣・竹富方言の尊敬動詞　ʔo:ruŋ の祖形でもある。

ちなみに、仲宗根（　1987 [1976]:231 ）はこのオワルが十五世紀のおもろさうしに尊敬動詞としてしか使われていないのに、十八世記の組踊りには自分の行動について話すとき（自尊動詞？）と目下の相手に命令するときに使われるようになっていると主張する。

(58)　diyo:tʃar-u　　munu=ja

出る.CNV.ALLOC-ADN　者=TOP

出て来た者は（＝私）（ 組踊り ）

(59)　saki=yu　saki=yu　　daʃo:r-i　　daʃo:r-i

酒=ACC　酒=ACC　　出す.HON?-IMP　　出す.HON?-IMP

お酒を出して　（ ゴサマルティチウチ ）

データを西岡　(2003:64)から引用している重野　(2010b:14) も指摘するように、組踊りにおけるオワル助動詞の用例はほとんど全部（37例のうち33例）が目下への命令である。つまり、ここで定義したアロキュティビティーの例とは認められない。

この分布は西岡 (2004) にも確認されている。ということで、尊敬動詞から丁寧・丁重（アロキュティブ）動詞への変遷は例（58）、士族系の組踊の担い手の初登場の際の自己紹介のセリフから始まったとしか考えられないように見える。再分析の

元となりうる用例が少ないものの、北琉球の現代のアロキュティブ形がオワルに遡ることは明らかであり、このような再分析は日本語の歴史にも行われたことがある (Antonov 2013) 。中世語のオヂャルとオリャルもさることながら (Frellesvig 2010:372-3)、現代語のゴザルも実はもともとは尊敬動詞のオワシマス（＜オワス+尊敬助動詞イマス）を記す漢字＜御座＞の音読み＜ゴザ＞に＜アル＞を添えたものに由来する（鈴木　1997:187）。

OJ	EMJ1	EMJ2	LMJ1	LMJ2	EModJ	ModJ
		(-)faber-	*(-)sauraw-*	*-sɔɔ(rɔɔ)*	*-(i)ma[ra]se-*	*-imas-*
				odyar-		**-(de) goza-imas-**
				oryar-		*-(de) or-imas-*
						moos(h)-imas-
						itas(h)-imas-
						mair-imas-

表 4 日本語の動詞アロキュティビティー形の変遷

一方、重野　(2010b:12) によれば、喜界島や徳之島方言のアロキュティブの接尾辞は、主動詞の連用形に助動詞アリを添えてできたものと見ている。これは仲宗根（　1987 [1976]:226 ）が首里方言の尊敬動詞　?menseɴ がもともとは　imi+ari > imeeɴ に meshi+ari > miseɴ の加わった複合形である説を踏まえたものである。正しいかはさておき、この説の論理は、中世語に主動詞の連用形にオ・ゴを接頭し、アリ・アルを接尾して生産的な尊敬動詞のパターンを見ても納得できるように思われる（鈴木　1997:187）。

3. 統語論から見た琉球諸語における動詞アロキュティビティー

3.1 アロキュティビティーと人称

表 5 は本章で概観した琉球言語のアロキュティブ形式がどんな動作主＞被動作主（主語＞対象）の場合に使用できるのかをまとめてみたものである。　データが不十分なため、聞き手が非項であるすべてのケースに使えるかどうかは言い難い。

	浦	名瀬	湯湾	古仁屋	志戸桶	井之川	田皆	与論	並里	首里
1	✓	?	✓	?	✓?	✓?	✓?	✓?	✓?	✓
2	?	?	?	?	?	?	?	✓	?	✓?
3	✓	✓	✓?	?	?	?	✓?	✓?	✓?	✓
1>2	?	?	?	?	?	?	?	?	?	✓?
2>1	?	?	?	?	?	?	?	?	?	✓?
1>3	?	✓?	?	?	✓	✓	✓	✓?	✓?	✓
3>1	?	?	?	?	?	?	?	?	?	✓?
2>3	?	✓?	?	?	?	?	✓?	✓?	✓?	✓?
3>2	?	?	?	?	?	?	?	?	?	✓?
3>3	?	✓?	?	✓	✓	✓	✓	✓?	✓?	✓?

表 5 動詞アロキュティビティーと人称

3.2 アロキュティビティーと文節タイプ

表 6 はアロキュティビティーとあらゆる文節タイプとの互換性を示そうとしているが、データがやはり十分ではないので、不明な点が数多くある。にもかかわらず、標準語とは違って従属節で使われる言語が琉球諸語にあることは明らかである。それはバスク語の標準語とは違う点でもあるが、実はバスク語の方言となると、日本語と琉球諸語のように疑問文でも従属節でもアロキュティブ形式が現れることがある（ de Rijk 2008:810, Adaskina and Grashchenkov 2009 ）。

	浦	名瀬	湯湾	古仁屋	志戸桶	井之川	田皆	与論	並里	首里
叙述	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
疑問	?	?	?	?	?	?	?	✓	?	✓?
感嘆	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
命令	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
従属	?	?	?	?	✓	?	✓	✓	✓	✓

表 6 動詞アロキュティビティーと文節タイプ

4. まとめ

この記事では公開された言語記述や文法に基づいて琉球諸語に存在する動詞アロキュティビティー（従来の丁寧・丁重語）のあらゆる接尾辞を概観してその由来や変遷について論じることを目的とした。しかし、記述が不十分であり、形態の面にしか言及しないものが大部分であり、詳しいことが分からない言語がまだたくさんある。それに、統語の面に言及しないとその接尾辞の使い方が標準語のマス形と同類であることを含意しているように思われる。

しかし、これは正しくない。場合によってはある形式がアロキュティブか尊敬形か定かではないこともある。それは例えば挙げられた唯一の用例が聞き手を主語とした疑問文の場合である。標準語のアロキュティブ形もそのような用法があるとはいえ、記述が不十分な言語の場合はその形式が聞き手が非項でも使えるかどうかがそれだけでは判断しがたいのである。

動詞アロキュティビティーは世界の言語には滅多に見られない現象である。それが故、琉球諸言語におけるアロキュティビティーの記述はできるだけ詳細なものとしたい。表6に記載してあるシナリオの全部で使えるかどうかを自動詞と他動詞を使ってちゃんと確認し、聞き手が非項の場合でも使えるならアロキュティブ形と見做せばよい。そのため、疑問文ではなくて、聞き手が動詞の項ではない叙述文 (1>3, 3>1, 3>3)で、尊敬や謙譲の用法の可能性のないようなシナリオで調査してみたい。自動詞で主語が一人称か尊敬の対象となれない三人称（例えば、弟や主語が所有していない無生物）が最適のように思われる。最後ではあるが、主節だけではなく、あらゆる従属節においても使用できるかどうかを調査して明記したい。

言語

EMJ	Early Middle Japanese 中古語(800-1200) (EMJ1: 9c-11c/EMJ2: 11c-12c)
EModJ	Early Modern Japanese 近代語(1600-1750)
LMJ	Late Middle Japanese 中世語 (1200-1600) (LMJ1: 12c-14c/LMJ2: 14c-16c)
ModJ	Modern Japanese 現代語 (1750-)
(W)OJ	(Western) Old Japanese 上代中央語(700-800)

文献

HM	浜松中納言物語 (1064?)
OS	おもろさうし (16 世紀)
SM	宣命 (7-8 世紀)
TM	竹取物語 (9-10 世紀)

参照文献

Adaskina, Yulia and Pavel Grashchenkov (2009) Verb Morphology and Clause Structure in Basque : Allocutive. Presentation at *Morphology of the World's Languages*, University of Leipzig, 11-13 June 2009.

Aikhenvald, Alexandra (2010) *Imperatives and Commands*. Oxford: Oxford University Press.

Alberdi, Javier (1995) The develoment of the Basque system of terms of address and the allocutive conjugation. In: José Ignacio Hualde, Joseba A. Lakarra and Robert Lawrence Trask (eds.) *Towards a history of the Basque language*, 275–295. Amsterdam: John Benjamins.

Antonov, Anton (2013) Grammaticalization of allocutivity markers in Japanese and Korean in a cross-linguistic perspective. In: Martine Robbeets and Hubert Cuyckens (eds.) *Shared Grammaticalization with special focus on the Transeurasian languages*, 317-340. Amsterdam: John Benjamins.

Antonov, Anton (2015) Verbal allocutivity in a crosslingusitic perspective. *Linguistic typology*, 19(1):1-43.

Appleyard, David (2004) Beja as a Cushitic Language. In: Gábor Takács (ed.) *Egyptian and Semito-Hamitic (Afro-Asiatic) Studies: in memoriam W. Vycichl*, *Studies in Semitic Languages and Linguistics*, vol. 39, 175–195. Amsterdam: Brill.

Appleyard, David (2007) Beja Morphology. In: Alan S. Kaye (ed.) *Morphologies of Asia and Africa*, vol. 1, 447–481. Indiana: Eisenbrauns.

Aso, Reiko (2010) Hateruma (Yaeyama Ryukyuan). In: Shimoji and Pellard (2010), 189–227. Tokyo: RILCAA.

Bonaparte, Louis-Lucien (1862) *Langue basque et langues finnoises*. London: Strangeways & Walden.

Diller, Anthony (2008) Resources for Thai Language Research. In: Anthony V. N. Diller, Jerold A. Edmondson and Yongxian Luo (eds.) *The Tai-Kadai Languages*, 46–48. London and New York: Routledge.

Frellesvig, Bjarke (2010) *A History of the Japanese Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Geertz, Clifford (1976) The Background and General Dimensions of Prijaji Belief and Etiquette. In: *The Religion of Java*, 248–260. Chicago: University of Chicago Press.

Hayashi, Yuka (2010) Ikema (Miyako Ryukyuan). In: Shimoji and Pellard (2010), 167–188. Tokyo: RILCAA.

平山輝男　(1986)『奄美方言基礎語彙の研究』　東京：角川書店.

外間守善　(1997)「琉歌*百*控」　友久武文･山内洋一郎･真鍋昌弘･森山弘毅･井出幸男･外間守善　（校注）『田植草紙･山家鳥虫歌･鄙廼一曲･琉歌百控』（新日本古典文学大系）　東京：岩波書店.

外間守善･波照間永吉 (2002)『定本おもろさうし』　東京：角川書店.

外間守善･西郷信綱 (1976 [1972])『おもろさうし』　東京：岩波書店.

Hualde, José Ignacio and Jon Ortiz de Urbina (eds.) (2003) *A Grammar of Basque*. Berlin: Mouton de Gruyter.

伊是名島方言辞典編集委員会　(2004)『伊是名島方言辞典』伊是名村教育委員会.

亀井孝･河野六郎･千野 栄一（編） (1997)『日本列島の言語』東京：三省堂.

狩俣茂久　(1997a) 「琉球列島の言語–宮古方言」亀井孝･河野六郎･千野 栄一 (1997), 388–403. 東京： 三省堂.

狩俣茂久　(1997b) 「琉球列島の言語–八重山方言」亀井孝･河野六郎･千野 栄一　(1997), 403–413. 東京： 三省堂.

Kennard, Edward (1936) Mandan grammar. *International Journal of American Linguistics*, *9*, 1-43.

菊千代､高橋俊三 (2005)『与論方言辞典』東京：武蔵野書院

Kroeker, Menno (2001) A Descriptive Grammar of Nambikuara. International Journal of American Linguistics 67:1–87.

前新透　(2011)『竹富方言辞典』石垣：南山舎.

Matayoshi, Satomi (2010) Tsuken (Okinawan). In: Shimoji and Pellard (2010), 89–111. Tokyo: RILCAA.

間宮厚司　(2005)『おもろさうしの言語』　東京: 笠間書院.

Mithun, Marianne (1999) *The Languages of Native North America*. Cambridge University Press.

宮城信勇　(2003a) 『石垣方言辞典』　那覇:沖縄タイムズ.

宮城信勇　(2003b) 『石垣方言辞典:文法､索引編』　那覇:沖縄タイムズ.

宮良信詳　(1995)『南琉球八重山石垣方言の文法』　東京:くろしお出版.

森山由紀子　(2007)「文法化観点から見た日本語敬語形式の通時的変遷試論」『同志社女子大学総合文化研究所紀要』 24:67–76.

Mosonyi, Jorge Carlos, and Jorge Ramón García. 2000. Yaruro (Pumé). In: Esteban Emilio Mosonyi and Jorge Carlos Mosonyi (eds.) *Manual de lenguas indígenas de Venezuela*, vol. 2, 544–593. Caracas: Fundación Bigott.

仲宗根政善　(1976)「宮古および沖縄本島方言の敬語法―『いらっしゃる』を中心として―」　九学会連合沖縄調査委員会 (編)

『沖縄 自然･文化･社会』 491-502. 東京：弘文堂

Niinaga, Yuto (2010) Yuwan (Amami Ryukyuan). In: Shimoji and Pellard (2010), 35–88. Tokyo: RILCAA.

『日本国語大辞典』 (2001-2) 第 2 版 . 東京：小学館.
西岡敏　(1994)「琉歌･組踊り語における動詞の活用表」『沖縄県立芸術大学付属研究所紀要』 7:39–89.
西岡敏　(2003)「組踊りの謙譲語–現代首里方言との比較を通して」『琉球の方言』 28:53–68.
西岡敏　(2004)「組踊り『万歳敵討』」『沖縄県立芸術大学付属研究所紀要』16:229–240.
西岡敏　(2010)「宮古方言における敬語法の記述–旧上野村野原方言の敬語動詞を中心に」 上野善道 （編）『日本語研究の12章』196–209. 東京：明治書院.
OGJ　(2001 [1963])『沖縄語辞典』国立国語研究所資料集 5. 東京：財務省印刷局.
沖森卓也（編） (2010) 『日本語史概説』東京：朝倉書店.
上代語辞典編修委員会　(1967)『時代別国語大辞典･上代編』東京：三省堂.
生塩睦子　(1999)『伊江島方言辞典』伊江：伊江村教育委員会
迫野虔徳　(2005)「おもろさうしのラ行四段動詞オワルの成立」『語文研究』 99:1–11.
Panfilov, V. S. (1993) *Grammaticeskij stroj v'etnamskogo jazyka*. Saint Petersburg: Saint Petersburg State University.
Pellard, Thomas (2010b) Ogami (Ryukyuan). In: Shimoji and Pellard (2010), 113–166. Tokyo: RILCAA.
Poedjosoedarmo, Soepomo (1968) Javanese Speech Levels. *Indonesia* 54–81.
Poedjosoedarmo, Soepomo (1969) Wordlist of Javanese Non-Ngoko Vocabularies. *Indonesia* 165–190.
Rehg, Kenneth L. and Damian G. Sohl (1981) *Ponapean Reference Grammar*. Hawai'i: Hawai'i University Press.
de Rijk, Rudolf P. G (1991) Familiarity or solidarity : The pronoun *hi* in Basque. In: *Revista lnternacional de los Estudios Vascos* 36(2): 373-378.
de Rijk, Rudolf P. G. (2008) *Standard Basque : A progressive grammar*. Boston: MIT Press.
重野裕美 (2010a) 「奄美大島龍郷町浦方言の敬語法」『広島大学大学院教育学

研究科紀要』 59:279–288.
重野裕美 (2010b)「奄美諸島方言の敬語法 ： 敬語形式の分布と展開に着目して」『国文学巧』 208:1–18.
Shigeno, Hiromi (2010c) Ura (Amami Ryukyuan). In: Shimoji and Pellard (2010), 15–34. Tokyo: RILCAA.
島袋幸子 (1997)「琉球列島の言語–沖縄北部方言」亀井孝･河野六郎･千野栄一 (1997), 354-369. 東京： 三省堂.
清水彰 (2003-04) 標音おもろさうし注釈 . 研究叢書 . 大阪： 泉書院.
Shimoji, Michinori and Thomas Pellard (eds.) (2010) An Introduction to Ryukyuan Languages. Tokyo: RILCAA.
Sohn, Ho-min (1999) The Korean Language. Cambridge: Cambridge University Press.
Stevens, Alan M. (1965) Language Levels in Madurese. *Language* 41:294–302.
*須山奈保子 (*1997)「琉球列島の言語–奄美方言」 亀井孝･河野六郎･千野栄一 (1997), 311–354. 東京： 三省堂.
*鈴木丹次郎 (*1997)「日本語の歴史—敬語」亀井孝･河野六郎･千野 栄一 (1997) , 184–190. 東京： 三省堂.
高橋俊三 (1991)『おもろさうしの動詞の研究』東京：武蔵野書院.
高橋俊三 (1997a) 「琉球列島の言語–古典琉球語」亀井孝･河野六郎･千野栄一 (1997), 422–431. 東京： 三省堂.
高橋俊三 (1997b) 「琉球列島の言語–与那国方言」 亀井孝･河野六郎･千野栄一 (1997), 413–422. 東京： 三省堂.
高山善行･青木博史･福田嘉一郎編 (2010)『日本語文法史』 東京：ひつじ書房.
寺師忠夫(1985)『奄美方言その音韻と文法』那覇：根元書房.
Thompson, Laurence C. (1987) *A Vietnamese Reference Grammar*. Number XIII-XIV in Mon-Khmer Studies. Hawai'i: University of Hawai'i Press.
Tournadre, Nicolas and Sangda Dorje (1998) *Manuel de tibétain standard*. Paris: L'Asiathèque.
Trechter, Sara (1995) The pragmatic functions of gender deixis in Lakhota. Doctoral Dissertation, University of Kansas: Lawrence.

津波古敏子　(1997)「琉球列島の言語–沖縄中南部方言」 亀井孝･河野六郎･千野 栄一　(1997), 369-388. 東京： 三省堂 .

内間直人　(1984) 琉球方言の研究 . 東京： 笠間書院 .

内間直人･野原三義　(1976)「奄美大島宇検村湯湾方言の文法」『琉球の方言』2.

上村幸雄　(1997)「琉球列島の言語–総説」亀井孝･河野六郎･千野 栄一 (1997), 311–354. 東京： 三省堂 .

Vovin, Alexander (2003) *A Reference Grammar of Classical Japanese Prose*. London: Routledge Curzon.

Vovin, Alexander (2005) *A Descriptive and Comparative Grammar of Western Old Japanese, Part I : Phonology, Script, Lexicon and Nominals*. Kent: Global Oriental.

Vovin, Alexander (2009a) *A Descriptive and Comparative Grammar of Western Old Japanese, Part II*. Kent: Global Oriental.

Vovin, Alexander (2009b) *Man'yōshū: a new English translation containing the original text, Kana transliteration, Romanization, glossing and commentary*. Kent: Global Oriental.

Wheatley, Julian K. (2003) Burmese. In: Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*, 195–207. London and New York: Routledge.

Wolff, John U. and Soepomo Poedjosoedarmo (1982) *Communicative Codes in Central Java*. Southeast Asia Program Publications. Ithaca: Cornell University.

与儀達敏　(1934)「宮古島方言研究」『方言』　7:49–77.